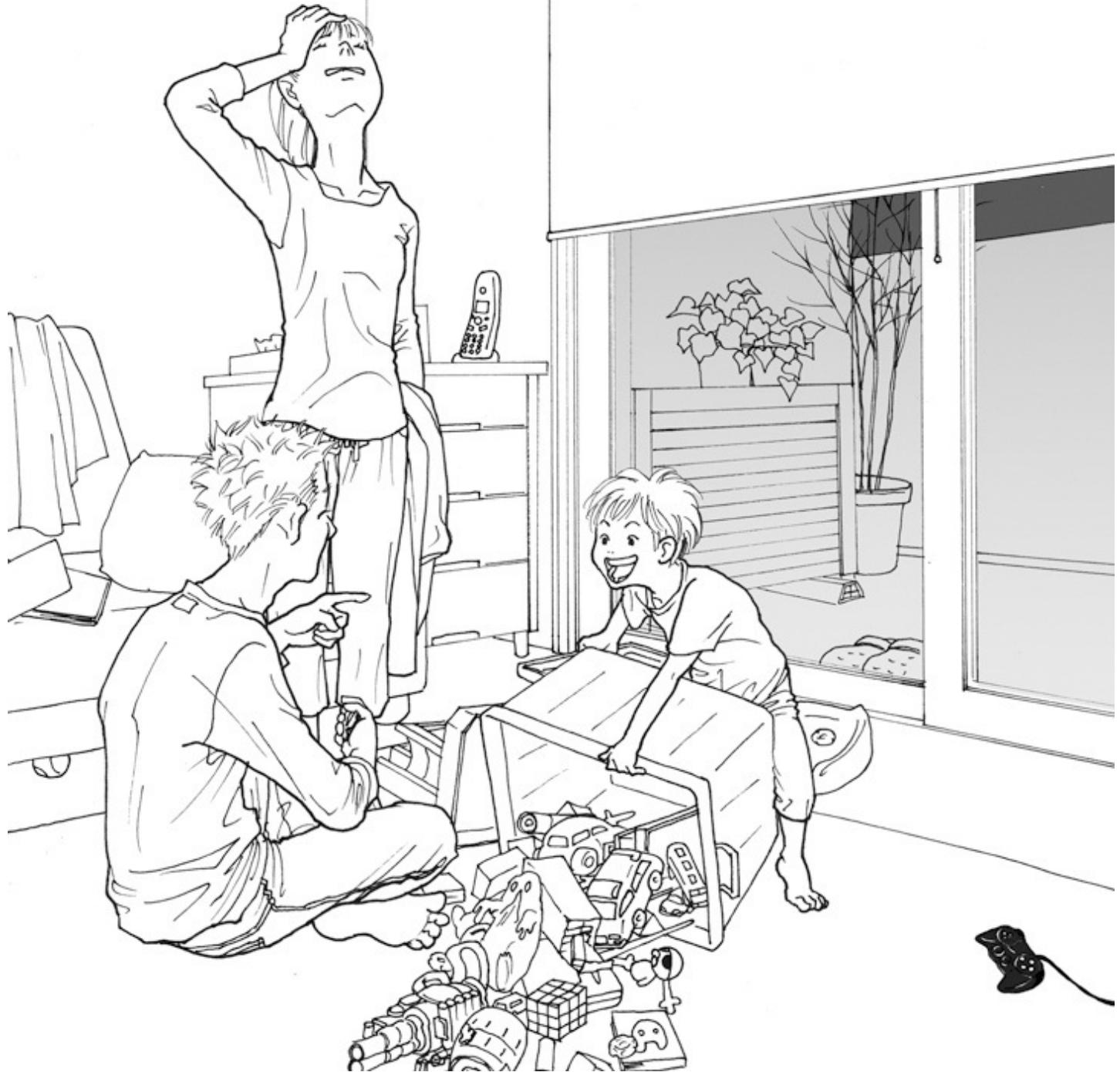


ゆうくんと さかさまのくに



ゆうくんが ふわあと、おおきなあくびをしました。
「ゆうくん、さあ、ねるじゅんびしましょ。」
「まだねむくなーい。」
「あくびしてたじゃないか。かたづけておとうさんと はみがきしよう。」
へんじのかわりに、ゆうくんはおもちゃをざざあ とだしました。
「ゆうくん！」 おかあさんがキッとめをつりあげました。
「おとうさん、つぎなにしてあそぶ？」 ゆうくんはおかまいなし。
「さかさまのことばっかりするゆうくんなんて、しーらない。」
おかあさんは、ブイと、むこうへいってしました。
「おとうさんはいいこだから ねるじゅんびしようっと。」



だれもまわりにいなくなつて、ゆうくんはブゥとふくれて、かたづけもしないで、おふろにもはいらぬで、はみがきもしないで、パジャマにもきがえないで、そのままゆかにゴロンとねころがりました。

—おとなは、なんでいつもぼくのしたいことと、さかさまのこというんだろう。おとなが子どものいうことをきいたらいいのに。あそぶとほめられて、たのしいことはずっとつづいて…。あーあ、そんなさかさまのくにないかなあ。あつたらいいのになあ。



そんなくにをゆめみるゆうくんは、つぎのひもつぎのひも やっぱり
やりたいほうだい。

12 1

ゆうくんにとってたのしいことは、たいていみんなをおこらせたり
こまらせてしまします。でも、ゆうくんはそんなのおかまいなし。
たのしくてたのしくてしかたありません

やさい
ジャム
¥300

とあるな

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0

-1

-2

-3

-4

-5

-6

-7

-8

-9

-10

-11

-12

-13

-14

-15

-16

そしてついに、おとうさんとおかあさんの かんにんぶくろの おがき
れて、ものすごくおそろしいかおになって、ゆうくんにいいました。

「そんなにさかさましたいなら、
さかさまのくにへいきなさああい！」

そのときです。とつぜんいえのなかがぐにゅりとまがって、すさまじいかぜがどどおとふいて、うえもしたもわからなくなって、あつとうまにゆうくんをさらっていきました。



「はああ…。」

きがつくと、はやしのなか。やせっぽちのチーターがためいきをついています。

「どうしたの？」

「わたし、いいところがないの。はああ…。」

「そうかなあ？かっこいいけど。はじるのはやいし。」

「そんなこ、ほかにもいるもの。こんなにやせてるのも、このてんてんもようもだいきらい。ああ、こころがおもい。はああ…。」

「じゃあ、たのしいことをかんがえるといいよ。」

「どんなこと？」

チーターはめだけを、ちらりとゆうくんのほうへむけました。

「さかさまのくに。かなしいときにはげんきになれて、たのしいことがつづくくに。」

チーターのひとみが、きらりとひかりました。

「ふうん、そんなところ、いってみたいな。」

「うん、ぼくもそこへいきたいんだ。ねえ、いつしょにさがそうよ。」

「うん。」

ふたりはならんであるきはじめました。

ガサガサ ガサガサ

ふたりのあとをつけてくるように、やぶのなかからおとがします。

ガサガサ ガサガサ！

「ぐわおああああ」



「さかさまのくにい？なんだそれは。」

「おとながこどものいうことをきくくに。たのしいことがつづくくにだよ。」

「つらいことがなくなつて、こころから わらえるくによ。」

フゥム、とクマはうなずきました。

「オレさまはたいくつしているんだ。よし、ついていってやる。いや、おまえらが、ついてこい。」

クマはおおいぱりで ふたりのまえを あるきはじめました。



しばらくあるくと、みちのまんなかに びんがコロンところがっていました。

「うめジャムだ。」「うまそうだな。」「うめジャム、だいすき。」

そのさきにはまじょが、ヒイ、フウ、いきをきらしながら、ジャムをつんだにぐるまをひいていました。



「おばあさん、おもそうだね。どこまではこぶの？」

「フン、なんだいおまえたち。ジャムをぬすむきだろ。いしこロにしてやる。」

「そんなことしないわ。わたしたちさかさまのくにをさがしているの。」

「おばあさん、まほうつかえるんでしょう？まほうではこべはいいのに。」

「フン、じょうだんじゃない。このジャムはわたしのじまんなんだ。
まほうをつかったらあじがおちる。なんだいおまえたち、いきさきが
いっしょならさっさとかわっとくれ。ぬすみぐいしたら しょうちしない
よ。ふざけておとしたりしたら、あしをねっこにしてやる。」
「ということは、じゃあ、おばさんもさかさまのくににくんだね。
さかさまのくにはあるんだ！」
ゆうくんたちはおおよろこびです。



「まったくへんななまえのくにからちゅうもんもらったもんだよ。
なんだってんだい？ そのくには。」
「たのしいことがつづくくにだよ。」
「そこにいけば、こころからわらえるようになれるの。」
「へん、オレさまはひまなんだ。ひまつぶしにいくだけだ。」
おばあさんは、
「そんなつごうのいいくにがあるもんかい。」
フン、とはなをならしました。

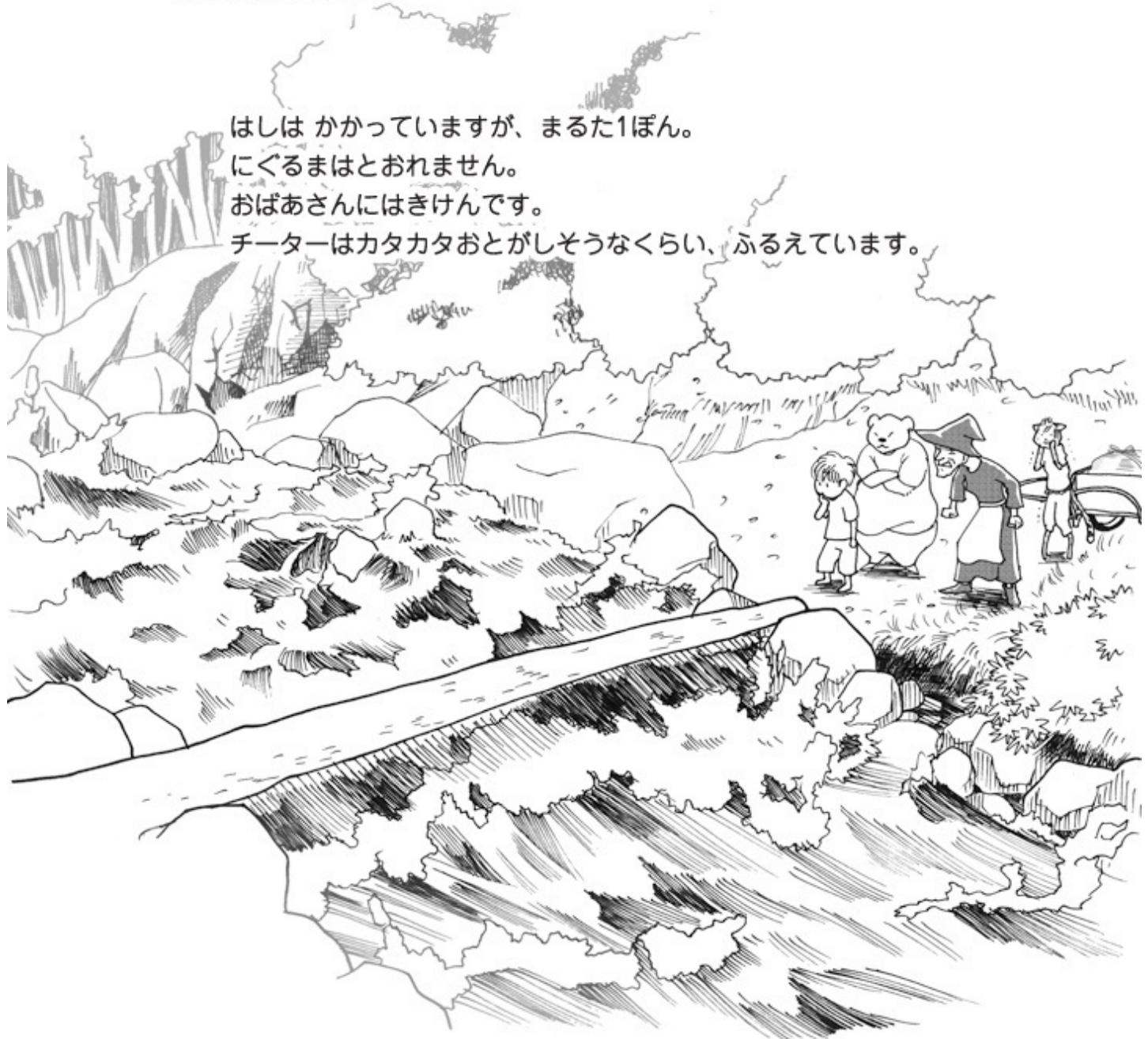
ゆうくんがにぐるまをひっぱって、おばあさんとチーターがうしろからおして、クマはおかまいなしにみちをすすむと、かわがドコンドコンとながれていきました。

はしはかかるっていますが、まるた1ぼん。

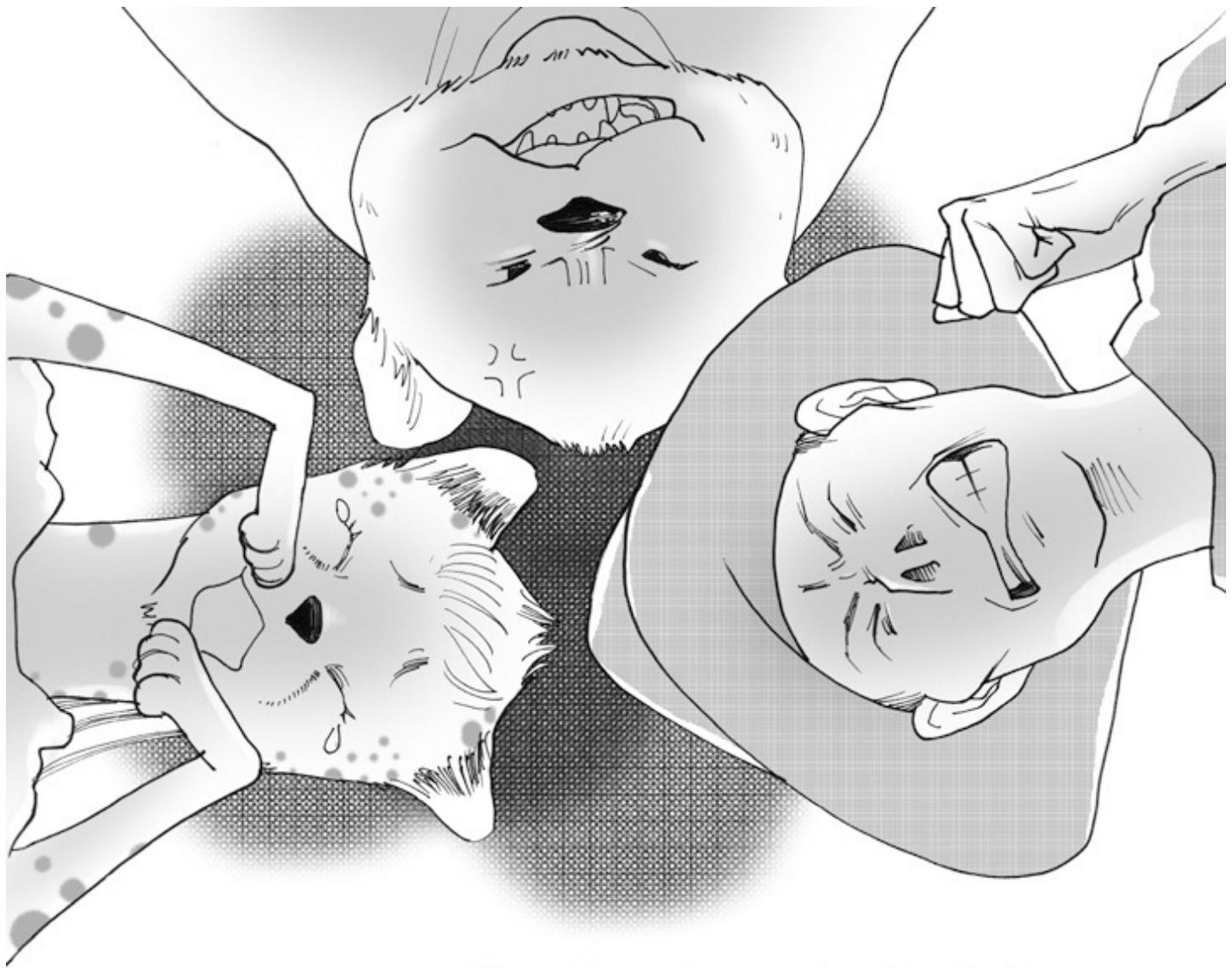
にぐるまはとおれません。

おばあさんにはきけんです。

チーターはカタカタおとがしそうなくらい、ふるえています。



「ぼくとチーターさんがさきにわたろう。クマさんはここからジャムをひとびんずつなげて。おばあさん、そのエプロンをかしてくれる？
それでうけとるから。」



「おいチビ、オレさまにめいれいするのか。」

「わ、わたし、わたれない。」

「フン、おまえらどうせジャムをぬすむつもりだろう。
どろだんごにしてやる。」



みんなくちくぐちに かってなことをいいはじめました。

「へん、オレさまはおことわりだね。こんなかわ、へのかっぱ。
おまえらはこまつていればいいのさ。オレさまひとりでさかさま
のくにへいってやる。わっはっは。」

クマのわらいごえをきいているうちに、ゆうくんはからだじゅうが
ひのようにあつくなつて、うわっとクマにとびかかりました。

「な、なんだ、このちょびすけ。」



ふたりがとっくみあいをしていると、

「おまえたちおよし！」

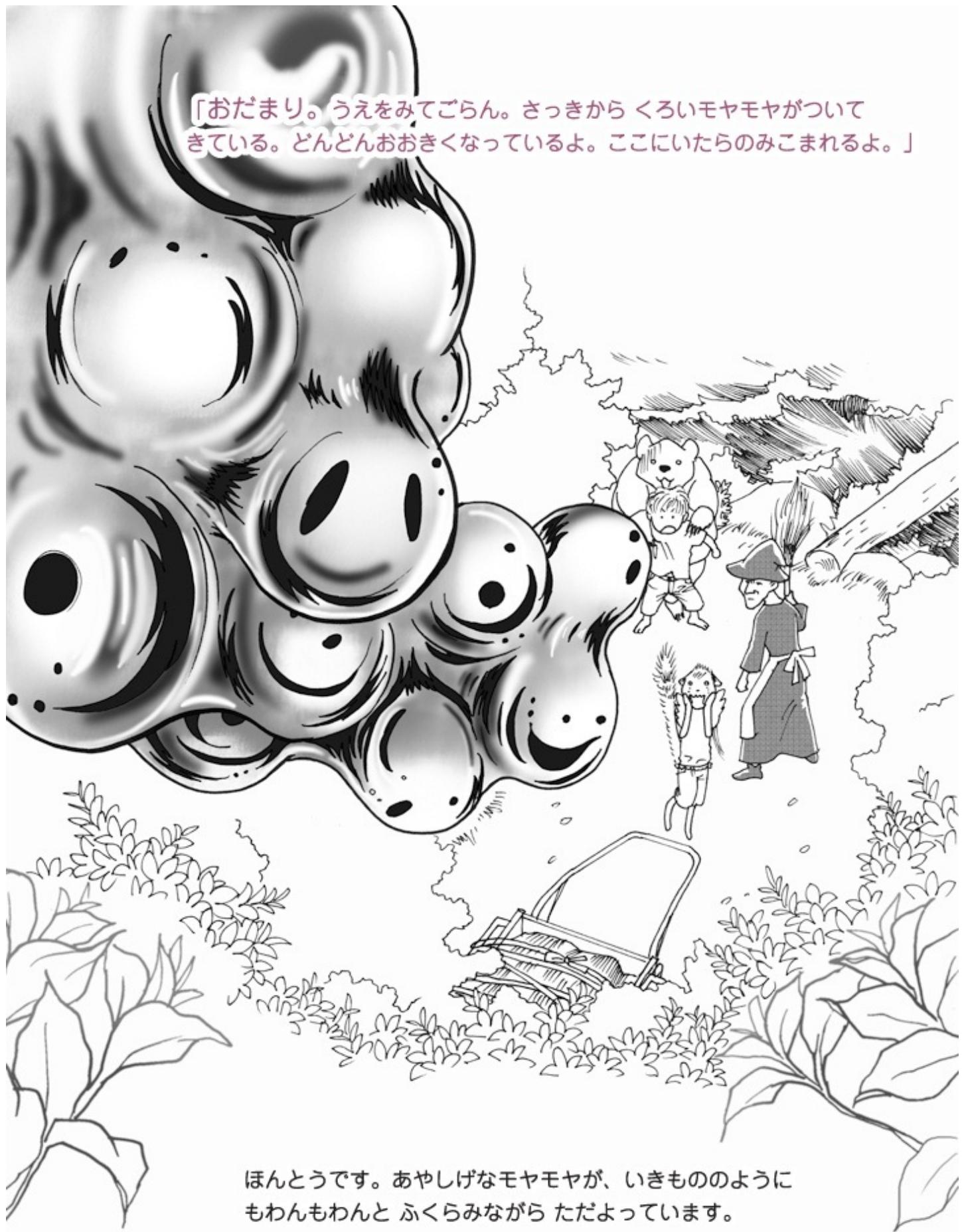


おばあさんの おおきなしづわがれごえに、ゆうくんとクマだけでなく、チーターまでも でんきがはしったように びっくり、とびあがりました。

「これからこどもはこまる。チビすけ、おまえは ゆうきはあるようだが、なんのためにあるんだい。クマもなんだい、ずうたいばかりでかくてなさけない。おまえのこころはつかいふるしのスポンジかい。」

「なんだとぉ！」

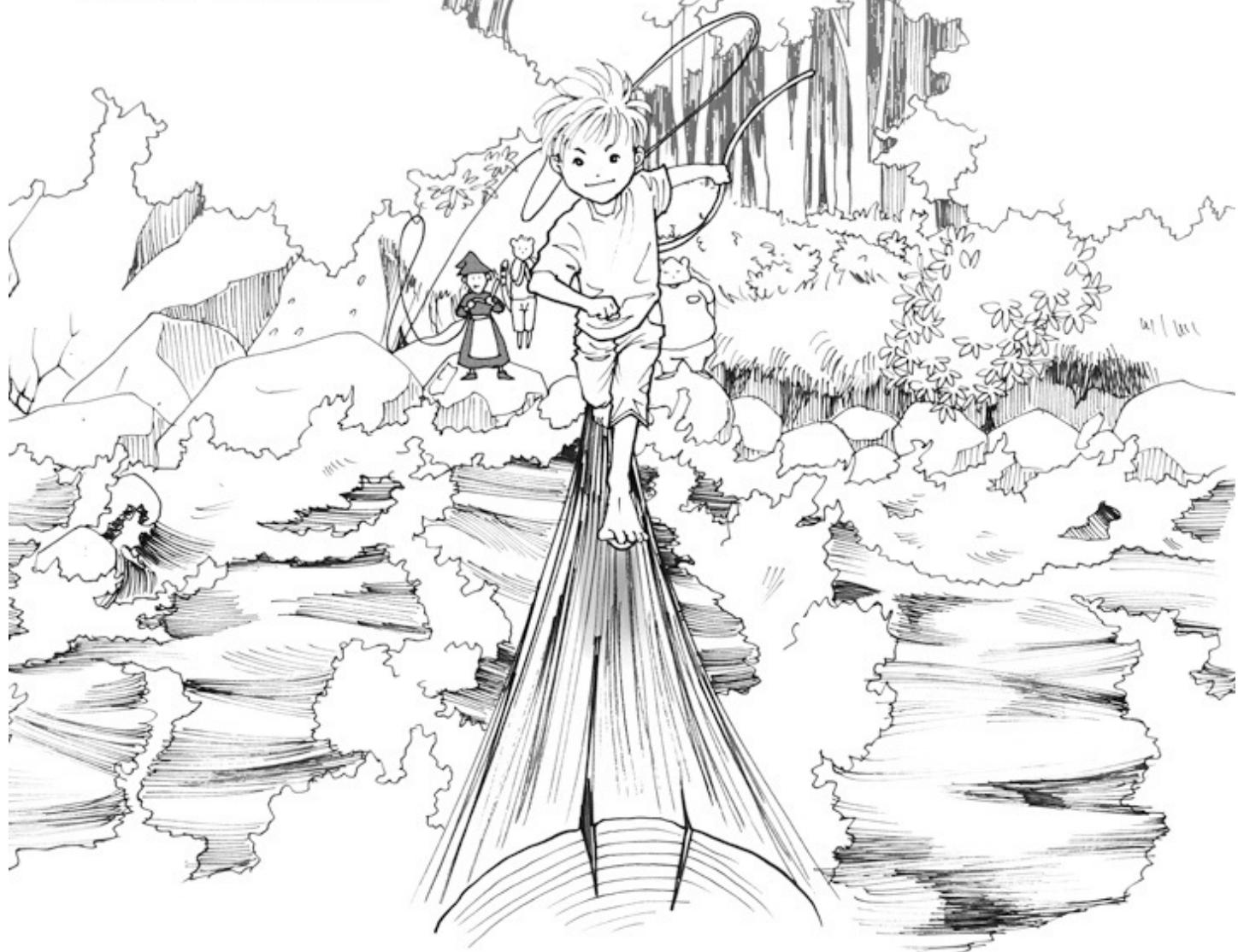
「おだまり。うえをみてごらん。さっきからくろいモヤモヤがついて
きている。どんどんおおきくなっているよ。ここにいたらのみこまれるよ。」



ほんとうです。あやしげなモヤモヤが、いきもののように
もわんもわんとふくらみながらただよっています。



ゆうくんは にぐるまのロープを さっとほどくと、はしっこをおばあさん
にあずけ、もうかたほうのはしっこをもって、まるたをタタタと けいかい
にわたり、さけびました。



「チーターさん、わたるしかないよ。じぶんをしんじて。まっすぐまえ
をみて。モヤモヤにのみこまれたくないでしょう。」

こっくり、チーターはうなずきました。

ゆうくんとおばあさんはロープをピンとはり、てすりをつくりました。
ふたりのかおは、もうまっか。



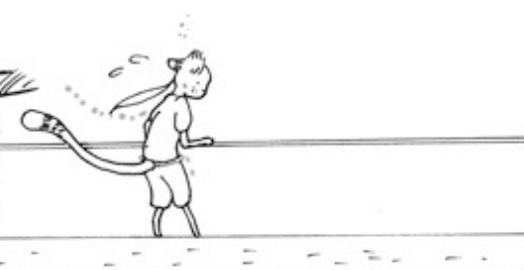
それをみていたクマは、なんだかじぶんがはずかしくなりました。
すると、クマがおばあさんからロープをとり、いいました。



「へん、たよりないな。ばあさんはあっちいって、
ちょびすけとふたりでひっぱれよ。」

おばあさんはうなずいて ロープをクマにわたすと、
ゆっくりゆっくり、ロープをたよりにはしを
わたりました。

そしてチーターも、おばあさんよりも
ゆっくりゆっくり、すすみました。



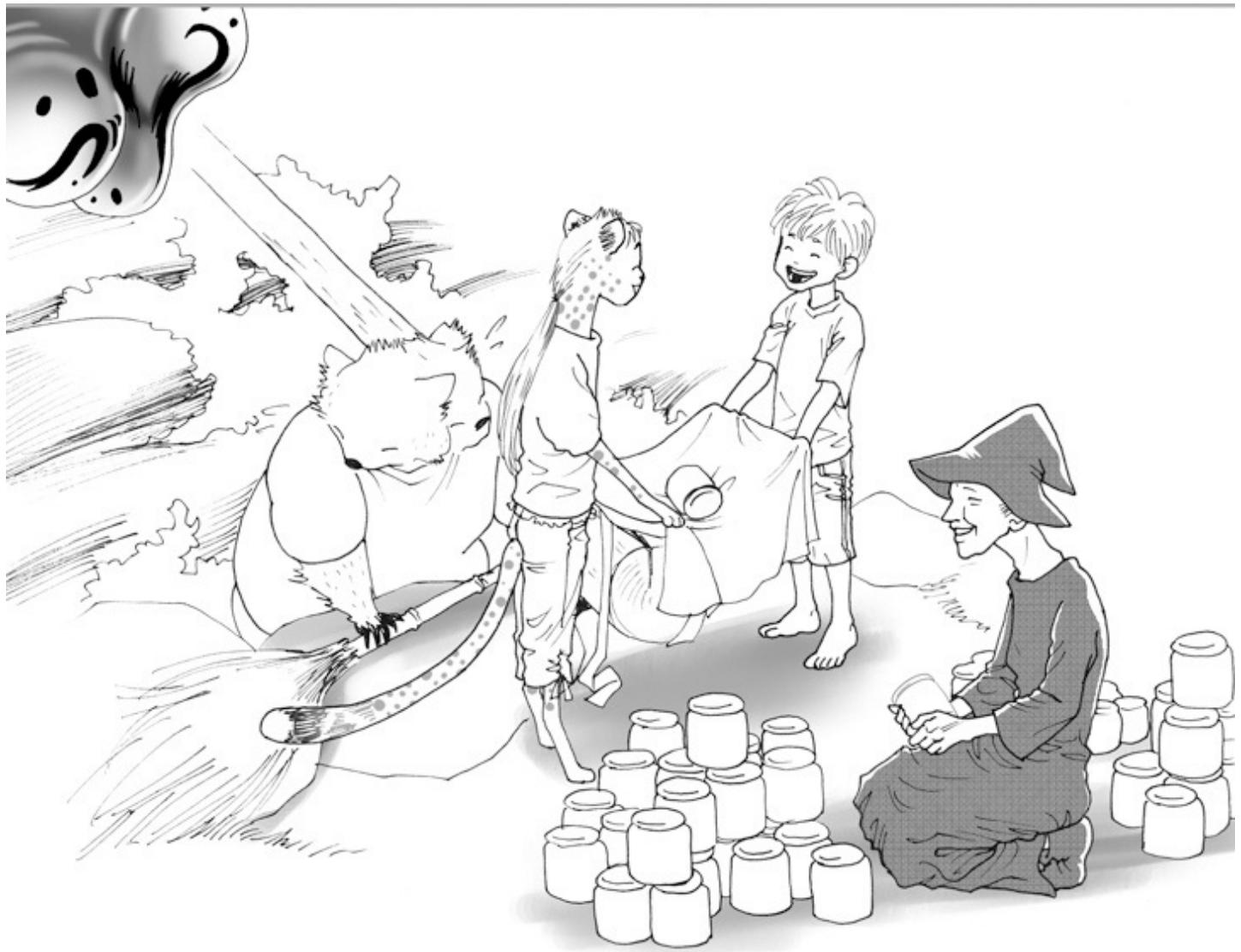
はんぶんをすぎたころ、どんどんゆうきがわいてきて、
どんどんどんどん すすみました。

「やったあ！」

「ありがとう、みんな。」

「さあ、ジャムをたのむよ。おとさないようにしつくれ。」





クマがぽーんとなげると、ゆうくんとチーターがキャッチ。

ぽーん、ポトン。ぽーん、ポトン。

いきもぴったり、たのしくなって、あっという間にジャムはすべて
むこうぎし。

「こどもたち、ありがとう。」

おばあさんはにっこりわらいました。

クマもふじにかわをわたり、みんなはさきへすすみます。
ゆうくんがうえをみると、モヤモヤはまだついてきています。

—あれ?

ゆうくんは、さっきよりモヤモヤがすこしちいさくなって、
くるしそうにしているようなきがしました。

「おばあさん、あとどのくらい？」

「さてね。『さかさまのくに いばらのこみち いきどまり おばけのきのした』
からのちゅうもんなんだが。」

「ね、ねえ、あれかしら…」

チーターがゆびでさしたほうをみると、

あ・あん

とおおきなくちをあけて、

オイデー… オイデー…

と、えだをゆらすきが。

そのしたには『はいるな』とかかれたドアがあります。





「クマさん、てつだって。」

「オ、オレ、いやだよ。ここここわいよ。ほんとうはそそそんなに
つつよくないんだ。」

クマはガチガチ、はをならしながらいました。



「みんなであけよう。」

ゆうくんがいいました。

「ここはさかさまのくに、こわいことはたのしいくに、はいるなどいわれたらはいるんだ！」

えいっ、とドアをあけたとき、なかからパアアとひかりがとびだし、モヤモヤはギャアとこえをあげてちいさくちぢみ、パアンとはじけてきました。すると、

わあ

と、ドアのなかからかんせいがあがりました。



「ジャムだジャムだ。」「おきゃくさんだ。」「いらっしゃい。」「おばあさんありがとう。」「よくきてくださいました。」

わいわいがやがや、なかからでてきたのはこびとたちでした。

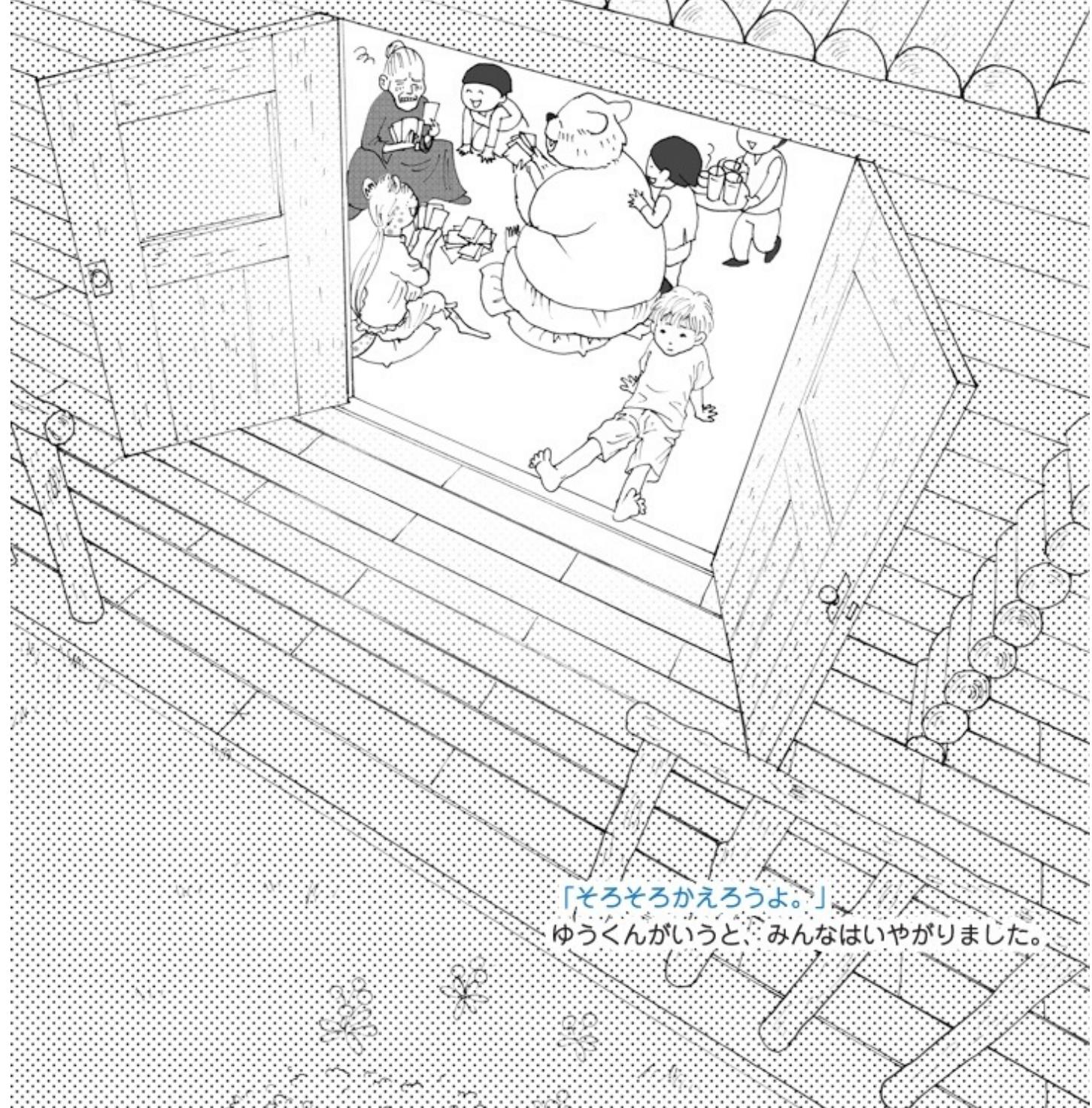
「わたしたちはながいながいあいだ、あなたがたのくにからのおきゃくさんやひょうばんのものをまっていました。」「けれどみちがわからなかったり、あきらめたり、ここにたどりつけないことがおおいのです。」「ほんとうによくきてくださいました。なかへどうぞ、かんげいします。」



ゆうくんたちはおちゃにまねかれ、ティーパーティになりました。
おばあさんのうめジャムはちょっぴりすっぱくて、かおりがよくて、
やさしいあじ。こびとたちはジャムとおきゃくさんがきて、ほんとうに
うれしそうです。
ゆうくんたちもおいしいおかしをたべて、こころはふんわり、いい
きぶん。にぎやかにたべてあそんで、みんなさかさまのくにがだい
すきになりました。
そこでまんまるのつきがてっぺんでひかっていても、こびとたちの
パーティーはつづきます。



ところがとつぜん、ゆうくんはたのしくなくなってしまいました。
すきなだけあそべる さかさまのくににきたというのに、だれも
かたづけなさい なんていわないので、あたまのなかで
『もうねるじゅんびのじかんだよ。』
とこえがして、はなのおくが「ツン」としたのです。



「そろそろかえろうよ。」
ゆうくんがいふと、みんなはいやがりました。

「わたし、ここにいたい。ここにいると、こころがかるいの。」
「オレも。ここにいるとさみしくない。とてもおちつくんだ。」
「わしも、こんなにしあわせをかんじるのは、はじめてだよ。」
「うん。ぼくもだよ。でも、おとうさんとおかさんがまっているとおもう。
みんなにもまっているひと、いるでしょう。」

しん、とへやからおとがきました。





「またいつでもきてください。ここへのきかたは、
みんなさんはもうまよったりしませんよ。」

「わたしたちも、とてもたのしかったです。」

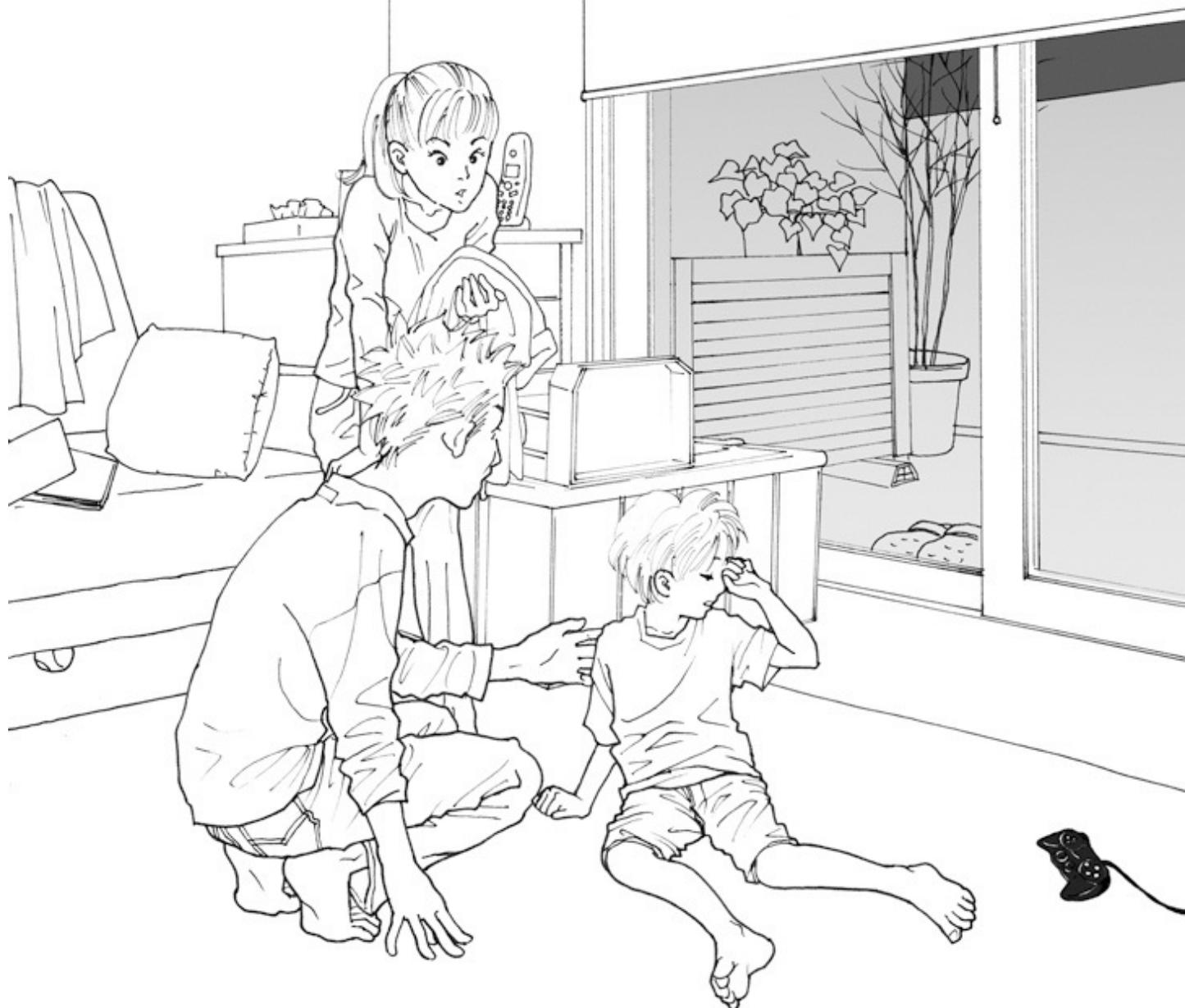
「このくにのことを、わすれないでくださいね。」

こびとたちのことばに、ゆうくんたちみんなは
おおきくうなづきました。

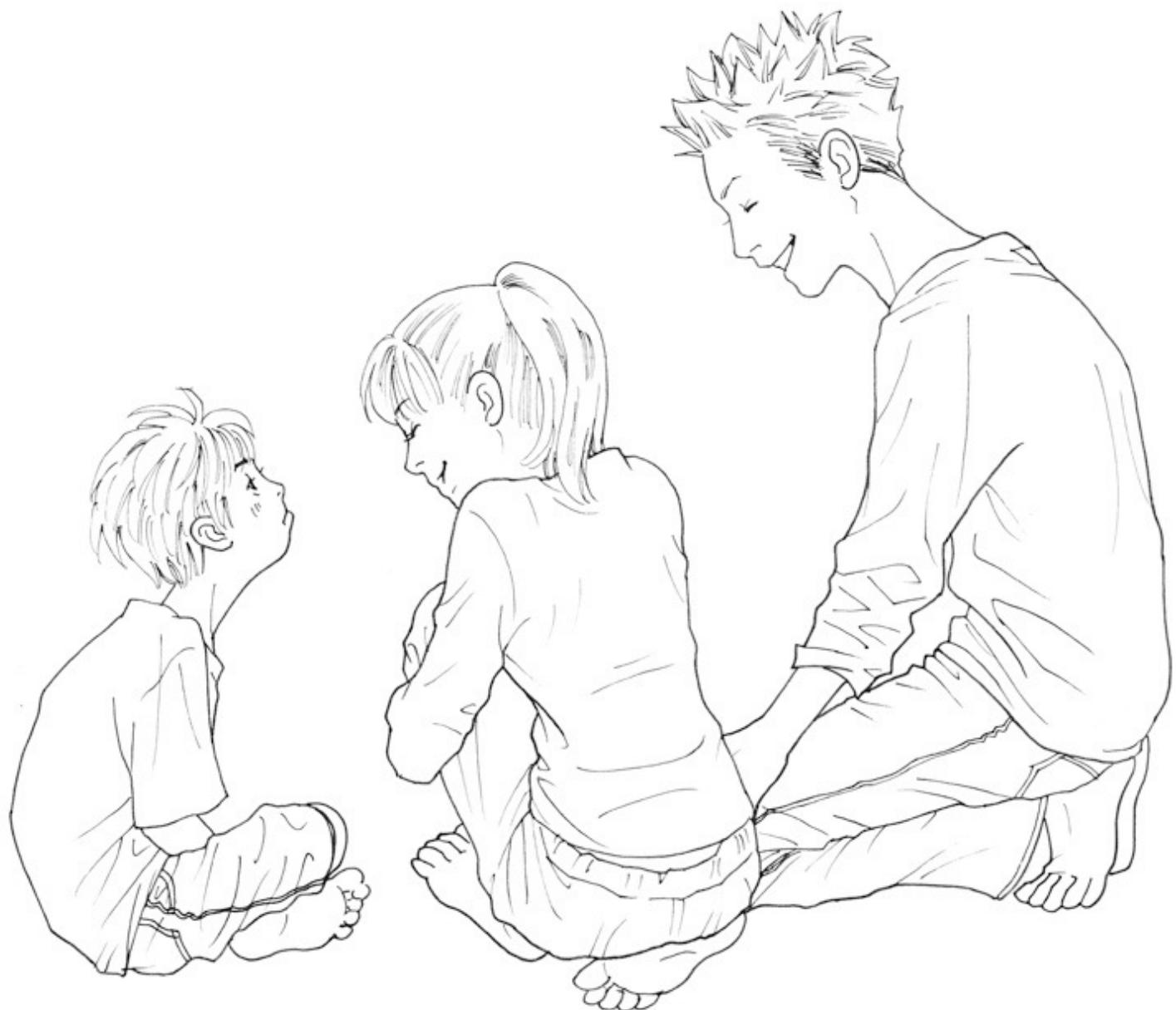
みんなはこびとたちのいえをあとにし、
ほしのかがやくなか、みちをもどりました。

「ゆうくん、ねるじゅんびしようか」

ゆうくんは、はっとしました。
めのまえにあるのは、おとうさんとおかさんのかお。
「あれ？みんなは？」
「みんな？」
「うん、ぼく、さかさまのくにへいって…。あれ？」



おとうさんとおかあさんが、かおをみあわせて、ふんわりわらいました。



「どんなところだった？」 おかあさんがききました。

「やりたいほうだいか？」 おとうさんがいたずらっぽくききました。

「ううん、たのしかったけど、そうじゃなかった。ううん、ええとね、
ええとね、うーん…。」

はなしたいことはたくさんあるのに、なかなかうまくことばにできません。

「ねるじゅんびして、またおはなししてくれる？」
おかあさんがいうと、ゆうくんは、くびをかしげて
「んー。」とかんがえ、こっくりうなずきました。





いつものゆうくんとさかさまに、ねるじゅんびをしてみんなでおふとんにはいったら、ふんわりとってもいいきぶんでした。